

社会と私

高三

「よし、中学から特別支援学校に通おう。」そう心に決めたのは小学校六年生の頃でした。

私が特別支援学校の存在を知ったのは、小学校の支援員さんのおかげでした。

小学校四年生の頃、自分の思うがまま行動できるクラスメイトと、少しずつ動けなくなってきた自分とを比べて、「何で自分だけ違うの」と、自暴自棄になってしまい、クラスメイトに会うのも嫌だと感じる状態になっていました。

そんな状態が二年くらい続いて、ようやく卒業の年となっても、私はまだ一步を踏み出せず、皆と同じ教室に入ることができませんでした。そのような時、支援員さんに、

「中学はどうするの。きっと地元の中学に皆は進むと思うよ。」

と言われ、私は目先の「明日学校に行けるかどうか」ということしか考えていなかったため、支援員さんの言葉にはっとしました。さらに、

「特別支援学校って知っている？ここは障害のある子たちが通う学校だから、もしかしたら分かり合える子がいるかもしれないね。」

とも言われました。私はそこで初めてそういう学校があるということを知りました。それを機に、今まで関わっていた社会とは別の新しい社会に踏み出す決心をしました。

晴れて入学式を迎えたとき、体育館にたくさん乗っけている子がこんなにもたくさんいるのか。」と驚くとともに、私はなぜ今まで気付かなかったのか不思議に思いました。今、その理由を考えるとき、今まで私が外に出ようとしなかったことが原因で、無意識に車いすの子を自分に重ね合わせ、シャットアウトしていたからではないかと思えます。

入学式はとても不安でしたが、すぐに友達ができ、また学年活動や部活動ではクラス以外の子と関わるが多くなりました。はじめは、どうコミュニケーションをとったらよいのか分かりませんでした。が、中学二年生の夏にデイサービスに通うようになり、そこで私より年下の子や同学年の

子に話しかけてみたところ、会話はできないけれど、笑顔や声を出すことで私が話しかけたことに對して返事をしてくれることが分かりました。この経験から、寄宿舎や学校でいろいろな子に声をかけられるようになりました。また、デイサービスでは、職員さんと話しているうちに他の作業所の職員さんとも仲良くなれたり、人生経験豊富な話も聞くことができたりしました。

小学校六年生のとき、それまで生きてきた社会とは別の新しい社会に踏み出した私は、少し大きくなつたような気がします。もし、あのとき支援員さんに特別支援学校のことを教えてもらっていなかったら、私は自分と向き合うこともできなかったと思います。

一步を踏み出したことで、私に関わる社会が広がるというのを胸に、これからも多くの決断をしたいと思います。